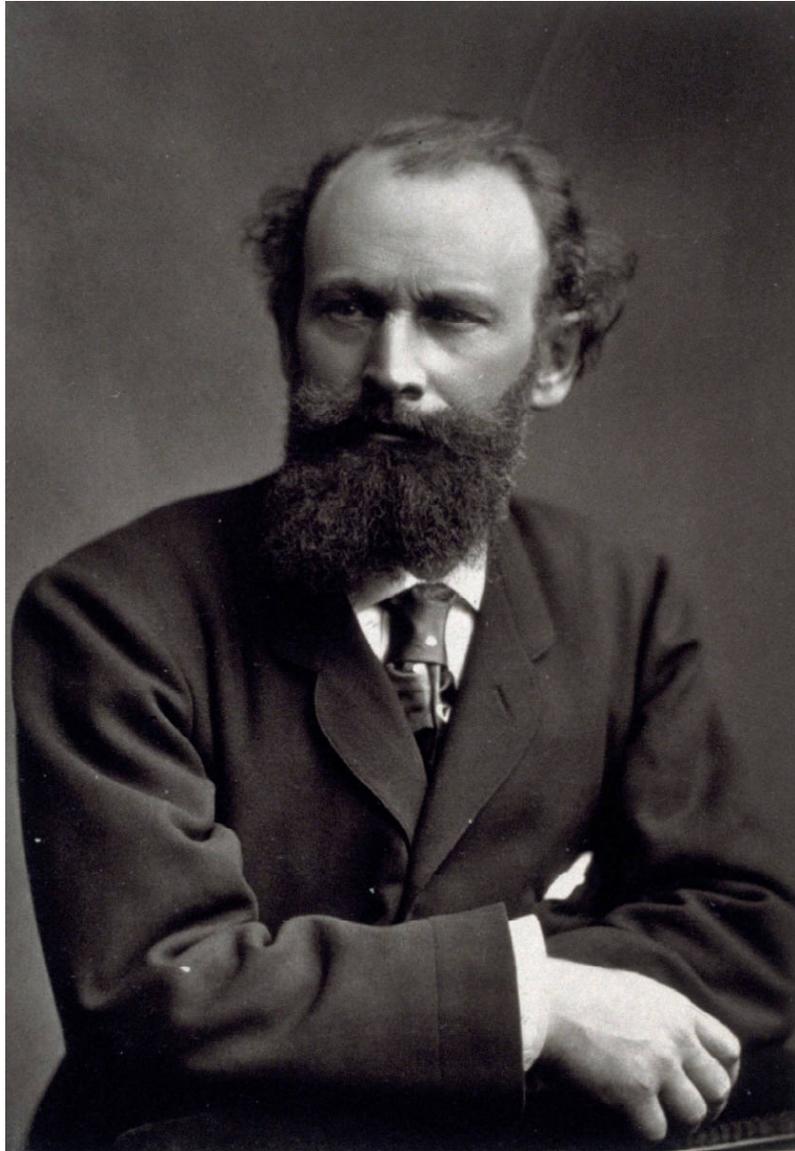


メルマガ 「いいテク・ニュース」 季語に遊ぶ 2019年1月23日 (Vol.151)

「エドゥアール・マネ、その絵画と俳句」

「エドゥアール・マネ、その絵画と俳句」



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ferdinand_Mulnier_-_Portrait_de_Edouard_Manet.jpg

「芸術には簡潔さが必要で、またそれがエレガンスをつくり出す」と言い、洒脱なタッチでとらえた光と色彩を駆使し、洗練された感覚でモネやルノワールなど印象派に影響を与え、近代美術の父と呼ばれるエドゥアール・マネ（1832-1883）。

「季語に遊ぶ」では前3回、西洋美術と俳句の組み合わせを試みています。

第4回の今回は『草上の昼食』『オランピア』『笛を吹く少年』『フォーリー・ベルジェールのバー』など伝統的な約束事にとらわれず、画家が目撃した人間関係のありさま、近代化・都市化する時代をありのままに描いたエドゥアール・マネ。

そんな彼の作品を制作時期順に掲載し、その作品に合う俳句を選んでみました。

お楽しみ下さい。

作品の下に制作時期 | 作品詳細 | 所在を記載しています。

俳句の下に作者、生年・没年を記載しています。

1. 『スペインの歌手』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Edouard_Manet_-_Le_chanteur_espagnol.jpg
1860年 | 油彩、キャンバス、147.3 × 114.3 cm | メトロポリタン美術館

1861年にマネが初めて、サロン・ド・パリ※に入選して好評を得た作品。

ある美術評論家は「何というみごとさ！このギター弾きはオペラ・コミックの役者が扮したものである……、厚い絵の具、大胆な筆さばき、写実主義的な色彩、—この等身大の人物像には非常な才能がみとめられる。」と語っています。

はつらつたる人物のとらえ方や絵の具の塗り方に、マネの独自性がうかがわれます。

新鮮な色調のコントラストによって、対象をいきいきと画面にうかびあがらせるマネ芸術の特質がここに表現されています。

※フランスの王立絵画彫刻アカデミーが18世紀にパリで開催するようになった公式美術展覧会。

以下の解説ではサロンと表現します。

ここでは「音楽に関する言葉」+季語で詠まれた句を選んでみました。

ギター弾く肘秋風に愛さるる

林翔(はやし しょう) (1914-2009)

季語<秋風>で秋

しんしんと雪降る夜は辛島聴く

黛まどか(まゆづみ まどか) (1962-)

季語<雪>で冬

辛島はサイレント・イヴなどのヒット曲があるシンガーソングライター辛島美登里(からしま みどり) (1961-)のこと。

黛まどかは「辛島聴く」を冬の季語に指定しています。

虹立つやサルサの歌手のおちよぼ口

仙田洋子(せんだ ようこ) (1962-)

季語<虹立つ>で夏

2. 『草上の昼食』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:%C3%89douard_Manet_-_Le_D%C3%A9jeuner_sur_l%27herbe.jpg
1863年 | 油彩、キャンパス、207 × 265 cm | オルセー美術館

1863年にサロンに出品し、「現実の裸体の女性」を描いたことが不道德とされ落選。

その後、サロンに落選した作品を集めた「落選展」に出品し、大いに物議をかました作品です。

もともとマネはこの作品を『水浴』と呼び、人間と自然とを清新な雰囲気のもとに調和させることをねらいとしていました。

しかし、当時の西洋絵画の主流は、裸体の女性を描いた作品は神話や歴史上の出来事において登場するものでした。

マネは男性2人を服を着た状態で描き、女性のみを裸のままとし、さらに女性が脱いだ服を左下のピクニックの持ち物の中に描くことによって「現実の裸体の女性」を強調しています。

このマネが描いた「現実の裸体の女性」は画期的な作品でしたが、それゆえに同時に痛烈な非難を浴びることになりました。

裸婦は1860年代～1870年代前半のマネの多くの作品でモデルを務め、女流画家でもあったヴィクトリーヌ・ムーランです。

『草上の昼食』から「裸」を詠んだ句を選んでいきます。

素裸はあやめの束を枕とす

阿波野青畝(あわの せいほ) (1899-1992)

季語<裸>と<あやめ>ともに夏

春の夜の空気うごけり素裸に

日野草城(ひの そうじょう) (1901-1956)

季語<春の夜>で春と<裸>は夏ですが、この句は春の夜で春

一糸なき裸がもてる無尽蔵

能村登四郎(のむら としろう) (1911-2001)

季語<裸>で夏

3. 『オランピア』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Edouard_Manet_-_Olympia_-_Google_Art_Project_3.jpg
1865年 | 油彩、キャンバス、130.5 × 191 cm | オルセー美術館

1865年にサロンに出品し入選しましたが、『草上の昼食』と同様に「現実の裸体の女性」を描いたことが批判を浴びました。

『オランピア』は陰語で娼婦の通称であったことが一番の理由ですが、描き方にも非難を浴びた原因があるようです。

とりたてて美しくもない女性がしらじらと裸身をさらし、その足もとには黒猫が目を光らせています。黒人の女性が届けられた花束を持ってきて、召使いとして描かれているこの絵は、当時考えられてきた神話や歴史上の出来事を描いた絵画に登場する裸体の女性とは異なっていて、当時のパリの裏の世界の断面があばき出されていることと、大衆に強くエロスを感じさせ、背徳感を抱かせ憤激されたようです。

ちなみにナポレオン3世のこの時代は空前の売春時代で、黒猫は「女性器」をも意味しました。

『オランピア』から連想させる句を選びました。

娼婦またよきか熟れたる柿食うぶ

季語<柿>で秋

売春や鶏卵にある掌の温み（鶏卵＝けいらん）（掌＝て）

季語<鶏卵>と<温み>で冬

実石榴のかつと割れたる情痴かな（実石榴＝みざくろ）

季語<実石榴>で秋

作者はいづれも第2次世界大戦直後に彗星のように俳壇に現われ、「娼婦俳人」とはやされ、その後生死不明になった「幻の俳人」鈴木しづ子（すずき しづこ）（1919-生死不明）です。

4. 『闘牛』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Edouard_Manet_-_The_Bullfight.jpg
1865-67年 | 油彩、キャンパス、48 × 60.4 cm | シカゴ美術館

『オランピア』の悪評に悩まされてスペインに逃れたマネは、マドリードでディエゴ・ベラスケス（1599-1660）やフランシス・デ・ゴヤ（1746-1828）の作品に感激し、また、闘牛に熱中しました。当時、友人にあてた手紙で、闘牛のもつドラマティックな感覚を絵に表現してみたいと語っています。スペインの思い出を胸にパリに戻ったマネはさっそく制作にとりかかりました。この絵はそうした作品の一つで、即興的な描写のようにみえながらも、白く光る地面の上に牛の黒い固まりと血を流す馬とを対比させ、また闘牛士の華麗なシルエット、手に持つ赤いムレータ（フランネル製の布とそれを支える棒）を彼方の太陽のざらつく青い空と対比させるというように、闘牛場のもつ明るさ、残酷さをよく表わしています。

俳句における「闘牛」は春の季語になります。

スペインの「闘牛」は闘牛士が牛を興奮させて剣で刺したりしますが、日本における「闘牛」は牛と牛が角を突き合わせる牛相撲です。

闘牛場我は旅人日除帽

高木晴子(たかぎ はるこ) (1915-2000)

季語<闘牛場>で春と<日除帽>で夏ですが、スペインの闘牛場と解して夏。

闘牛の負け牛の名はナポレオン

沢木欣一(さわき きんいち) (1919-2001)

季語<闘牛>で春

闘牛の涎を弓に花の風 (涎＝よだれ)

矢島渚男(やじま なぎさお) (1935-)

季語<闘牛>と<花>でともに春

5. 『笛を吹く少年』



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Manet,_Edouard_-_Young_Flautist,_or_The_Fifer,_1866_\(2\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Manet,_Edouard_-_Young_Flautist,_or_The_Fifer,_1866_(2).jpg)
1866年 | 油彩、キャンパス、160.5 × 97 cm | オルセー美術館

1865年のスペイン旅行の後に描かれたマネの代表作の一つ。

近衛軍の鼓笛兵の少年が何もない「消えた背景」の前に立っているだけで、手や足の部分を除けば影らしいものもなく濃い青、白、赤などの微妙に肉づけされた広い色面による構成は新しい時代を感じさせます。

対象をこのように「空気で包む」やり方を、マネが「画家の中の画家」と呼んだスペインの画家、ディエゴ・ベラスケス（1599-1660）から学んだようです。

また、日本の浮世絵の影響で画面が単純化されて似絵※（にせえ）のように見えます。

少年が吹いているのは「F i f e（ファイフ）」という木製の横笛で、絵の指づかいを真似て吹くと「ソ」の音が出ます。

※似絵

平安時代末期から鎌倉時代にかけて流行した、容貌を像主に似せて描いた大和絵系の肖像画のこと。

俳句で単に「祭」といえば夏の季語になり、春祭・秋祭と区別しています。

春や秋の祭りは豊作物豊穰の祈願や感謝のためのものがほとんどですが、夏の祭りは疫病や水害その他の災厄からの加護を祈るものが多いようです。

ここでは祭笛を詠んだ句を選んでみました。

祭笛うしろ姿のひた吹ける

橋本多佳子(はしもと たかこ) (1899-1963)

澄み聞ゆひとり稽古の祭笛

高浜年尾(たかはま としお) (1900-1979)

祭の子笛吹く真似を畦づたひ（畦＝あぜ）

伊丹三樹彦(いたみ みきひこ) (1920-)

6. 『ロンシャンの競馬場』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Edouard_Manet_053.jpg
1866年 | 油彩、キャンバス、44 × 84.2 cm | シカゴ美術館

競馬は当時の大衆の間で、モダンな楽しみの一つでした。

中でも、ロンシャン競馬場は、パリ郊外西部のブローニュの森の中に位置し、フランス競馬の象徴とされる場所です。

競馬場の場面を描いたのはエドガー・ドガ（1834-1917）がマネよりも先です。すでに、1860～62年に描いており、そのことを自慢していました。

マネもその事実を認め、疾走中の馬の肢体がどのようにあるか研究していたドガと違って「馬を描く習慣をもっていないので、馬をどう描くのかよく知っている人々のものから私は写した」と語っています。

しかし、レース最後の瞬間を切り取ったこの作品は、今まさにゴールラインを勢いよく駆けぬける競走馬の様子が臨場感豊かに表現されています。

俳句における競馬は5月5日に京都市北区上賀茂神社の馬場で行われる「賀茂の競馬」の神事をさし、初夏の季語になります。

堀河天皇の寛治7年（1093）に五穀豊穰、国家安泰を祈願して行われたのが始まりとされています。左方、右方それぞれ赤と黒2頭1組で5回行なわれ、最初だけは左方の勝ちと故事により決められています。

現代では神事というよりショーとして、当日馬場周辺は海外からの観光客をはじめとしておおいに賑わいます。

埒明けて目の塵払ふ競馬かな（埒＝らち、馬場の周囲の柵）

加藤暁台（かとう きょうたい）（1732-1792）

負け馬の眼のまじまじと人を視る

飯田蛇笏（いいた だこつ）（1885-1962）

勝馬を鎮めかねつつ鞍はずす（鎮め＝しずめ）

森田峠（もりた とうげ）（1924-2013）

7. 『すみれの花束をつけたベルト・モリゾ』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Edouard_Manet_-_Berthe_Morisot_With_a_Bouquet_of_Violets_-_Google_Art_Project.jpg

1872年 | 油彩、キャンパス、55.5 × 40.5 cm | オルセー美術館

ベルト・モリゾはマネの愛弟子であり、印象派運動に参加した唯一の女流画家としても知られています。

1860年代の後半、マネがサロンで世の非難を浴び、相次ぐスキャンダルの渦中にあった時、マネの弟子となり、後にはマネの弟のウジェーヌと結婚しました。

この肖像はマネ芸術の持つ純粋な絵画性をもっともよく伝えている作品です。

のびのびと歯切れのよい筆がベルトの表情をすばやくとらえ、軽く笑みを浮かべているのが印象的です。

黒に近い暗い色の衣服と帽子に白い室内の背景のコントラストが優雅な雰囲気をつくり出しています。

かつてスペインから学んだ黒の効果は、マネ自身のもの、洗練されたパリジャンの感覚となりかわっています。

色をほとんど使わない黒の陰影で表現された絵画の見本でもあります。

すみれの花束はとても分かりづらいですが描かれています。

すみれの名は、花を横から見ると大工道具の墨入（すみい）れに似ているところからきたとされています。

山道のかたすみにうつむき加減にひっそりと咲くさまは可憐で、慎ましい。

万葉集にも詠まれ、俳諧の季題として古くから親しまれています。

春の季語です。

かたまつて薄き光の莖かな

渡辺水巴(わたなべ すいは) (1882-1946)

すみれ野に罪あるごとく来て二人

鈴木真砂女(すずき まさじょ) (1906-2003)

方言かなし莖に語り及ぶとき

寺山修司(てらやま しゅうじ) (1935-1983)

8. 『一束のアスパラガス』と『アスパラガス』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Edouard_Manet_Bunch_of_Asparagus.jpg
1880年 | 油彩、キャンバス、46 × 55 cm | ヴァルラフ・リヒャルト美術館



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Edouard_Manet_-_Asparagus_-_Google_Art_Project.jpg
1880年 | 油彩、キャンバス、16.9 × 21.9 cm | オルセー美術館

マネの作品の中に『一束のアスパラガス』という静物画があります。
マネがこの作品をシェルル・エフリュシという人物に 800 フランで売却しました。
ところがその絵をとて気に入ったエフリュシ氏はマネの売却希望額より多い 1,000 フランを支払いました。
するとマネはアスパラガス 1 本だけの絵を描き、「先日お買い上げいただいたアスパラガスの束から 1 本抜け落ちていました。」というメッセージを添えてエフリュシ氏に贈ったという逸話があります。
マネがこの絵を描いたとき、彼はご機嫌がよく、のびのびリラックスした気分で描いたことが想像できます。
絵も、エピソードもお洒落です。

アスパラガスは和名は松葉独活（まつばうど）で晩春の季語になります。
ヨーロッパでは約 2,000 年も前から食されてきました。
多肉質の茎は、生長すると高さ 1.5 メートルにもなりますが、茎の若いときに食用とします。
株の上に盛り土して芽が地上に出ないうちに切り取ったものがホワイトアスパラガス、土寄せしないで幼芽に日光を当てて緑化させ、20 センチほどに伸びたころに収穫するのがグリーンアスパラガスです。

籐籠にアスパラガスを摘みて来し

長谷川かな女(はせがわ かなじょ) (1887-1969)

アスパラ北より早生トマト南より (早生＝わせ)

鈴木真砂女(すずき まさじょ) (1906-2003)

うつくしき雪いただくや松葉独活

渡辺白泉(わたなべ はくせん) (1913-1969)

9. 『ガラス花瓶の中のカーネーションとクレマチス』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Edouard_Manet_011.jpg
1882年 | 油彩、キャンバス、55 × 34 cm | オルセー美術館

晩年のマネは果物や花などの静物をよく描きました。

花ではとりわけリラ、ばら、カーネーションなどを好んだといわれています。

ひとつには、脚の病気がいよいよ昂じて苦痛は不断のものとなり、椅子に腰かけたまま小さな静物画を描くよりほかなかったからです。

マネの作品の解説者であるピエール・クールティヨンは「ひとたび彼が描くと花たちは不死となった。つかの間のものが永遠のものとなり変わっていた。これらの花々の新鮮さを見たまえ、あまりに完璧で、あまりにみずみずしいため、絵はまだ濡れているようだ。これが晩年の作だとは知らずとも、はかない命の美に寄せる別離の感情が感じとられるであろう。」と語っています。

本作品は同じ花瓶を使って描いたマネの最後の花の連作のうち、最初に手がけた作品といわれています。

ここでは「カーネーション」と「クレマチス」とクレマチスの原種である「鉄線花（てつせんか）」を詠んだ句を選びました。

カーネーションは母の日の花として有名。

ヨーロッパ原産で、我が国へはオランダから渡来。

温室栽培がさかんになり、1年中切り花として用いられるようになりましたが、露路植えのものは初夏に花を咲かしますので初夏の季語になります。

老神父カーネーションを持ち散歩

星野立子(ほしの たつこ) (1903-1984)

金髪の児の胸白きカーネーション (児=こ)

星野麥丘人(ほしの ばくきゅうじん) (1925-2013)

「鉄線花」は江戸時代に中国から渡来。

茎は冬でも枯れず鉄線のようなのでこの名があります。

5-6月にかけて、葉のつけ根から長い柄を出し、花びらのような6枚の萼(がく)を開きます。

色は透き通るような紫や白、薄紅で夏の庭で際だつ花です。

「鉄線花」や「風車(かざぐるま)」という品種を改良したものが「クレマチス」で蔓性植物の女王と称えられています。

初夏の季語です。

御所拝観の時鉄線の咲けりしか

正岡子規(まさおか しき) (1867-1902)

挫節後の藍あざやかなクレマチス

佐藤鬼房(さとう おにふさ) (1919-2002)

10. 『フォーリー・ベルジェールのバー』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Edouard_Manet,_A_Bar_at_the_Folies-Berg%C3%A8re.jpg

1882年 | 油彩、キャンバス、96 × 130 cm | コートールド・ギャラリー

1882年、マネがサロンに出品した最後の作品の一つ。

フォーリー・ベルジェールはフランスで最初のミュージックホールで、マネやトゥールーズ＝ロートレック（1864-1901）の画題になったパリのナイトシーンを代表する伝説的なホール。

中央に女神のように立つバーのメイドの空虚な表情と肉感的な表現、背景全体が鏡の中の映像という卓抜した構想、そこに映し出された華麗なパリの夜の世界、灯光にゆらめく紳士淑女たちと実在感に富む酒びんと果物の対比など、マネ芸術の絶頂と思わせてくれます。

鏡の中のメイドの背や右側の男は前景の立像の位置と物理的には合致しませんが、マネはそうした矛盾も意に介さぬほど自由さをもって描いています。

モデルは後に、マネの伝記作者となるバジールの愛人となった女性です。

この作品はサロンで大成功を収め、痛烈な批評家も「マネ氏の大勝利」と語ったと伝えられています。

しかし、この作品を完成した翌年にマネは死去しました。

死因は16歳の時ブラジルで感染した梅毒で、1880年頃から症状が悪化し、左脚の壊疽（えそ）が進行、1883年左脚を切断する手術を受けるも、経過が悪く4月30日51歳で亡くなりました。

ここでは「バー」あるいは「酒場」+季語で詠まれた句を選んでみました。

偽聖者尿る夜霧のバーの裏（尿る＝いばる）

小林康治（こばやし こうじ）（1912-1992）

季語＜夜霧＞で秋

春雷や帰りたくなきバーの椅子

戸板康二（といた やすじ）（1915-1993）

季語＜春雷＞で春

もの枯れて酒場に地獄耳揃ふ

小檜山繁子（こひやま しげこ）（1931-）

季語＜もの枯れて＞で冬

私も詠んでみました。

鉄線咲く酒場にマネの裸体画が

白井芳雄

季語＜鉄線＞で初夏

今回は「エドゥアール・マネ、その絵画と俳句」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：『現代世界美術全集 1 マネ』（集英社）（1970年）
1371-536001-3041

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修
『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』（講談社）
ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 春』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621031-1 C0392

『角川俳句大歳時記 夏』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621032-X C0392

『角川俳句大歳時記 秋』（角川学芸出版）
ISBN978-4-04-621033-3 C0392

『角川俳句大歳時記 冬』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621034-6 C0392

白井明大・有賀一広
『日本の七十二候を楽しむー旧暦のある暮らしー』（東邦出版）
ISBN978-4-8094-1011-6 C0076

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3F
TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com